

会 議 録

会議の名称	令和2年度第5回富士見市社会教育委員会議
開催日時	令和2年12月21日（月）午後7時00分～8時45分
開催場所	中央図書館 視聴覚ホール
出席者	搦木道代議長、吉田廣子委員、荒川照子委員、京谷恵子委員、 佐々木眞理子委員、古澤立巳委員、吉田徹子委員、蘇武伸吾 委員、米山隆二委員、堀川博基委員 アドバイザー（かつせらんどコーディネーター羽石貴裕氏） 事務局
欠席者	なし
公開・非公開	公開（傍聴人 0人）
会議次第	1 協議事項 ・地域子ども教室について
会議資料	定期刊行物
会議録確認	搦木道代議長

会議内容

1. 開会

○議長あいさつ

2. 協議事項

【議長】今日は、勝瀬小学校区の地域子ども教室かつせらんどより、コーディネーターの羽石貴裕氏に、アドバイザーとしてご出席いただいた。現場の方の声を聞ける貴重な機会なので、現状等お話しいただければ。最初に、今後の流れについて段取りを確認する。

- 1月：仮提言書を事務局より提示 ※会議は開催しない
宿題…あとがきの部分を各自作成し事務局へ提出
⇒事務局で提言書に反映
- 2月：提言書の最終確認
- 3月：提言書の提出

まずは前回会議の資料の構成案をもとに、提言書の全体像を確認する。「1、はじめに」については、私の方で作成させていただく。前回の会議までに各委員から挙げていただいた意見を、「2、問題の所在」、「3、課題の検討」でまとめていく。まとめは事務局に願います。それを読んだ上で、「5、おわりに」の部分を各委員3行～5行で考え事務局に提出いただき、2月の会議で確認するという流れを想定している。

【委員】異論ない。

【議長】では次に、羽石氏にお話を伺いたい。立上げより15年たっているわけだが、子どもの雰囲気が変わっているのではないかと個人的には感じているが、実際にスタッフとして携わる中で感じる事、また改善したいところ等について、率直なご意見を伺いたい。

【羽石】子どもの雰囲気については、変わっていないと感じる。子どもではなく保護者の感覚が変わってきた。子どもに体験活動をさせたいという保護者がかなり増えた。保護者からのそういったニーズはとても増えたと感じている。子どもについていえば、1年生から6年生までずっと参加してくれる子もいるが、そういう子は少なく全体の5パーセント程度。3年生までは半分程度、習い事を始める4年生くらいから参加が減る。かつせらんどに限らず、基本的には全児童を対象とした取組なので、各教室の募集の仕方にもよるが、かつせらんどでは1、2年生には9割方登録してもらっている。募集方法や登録制にするかどうかは市町村によって、また市内の教室間でも異なるので、関沢キッズクラブのように登録不要の自由参加という形もある。他に変わったこととしては、教職員の理解が増えたことがあげられると思う。「子ども教室」と言えばなんとなく理解してもらえようになった。しかし、学校応援団と比べるとやはり理解度は劣る。埼玉県によると、学校応援団の設置率は100パーセント、しかし子ども教室は30～40パーセントに留まる。子ども教室については県内でも設置状況に差

があり、富士見市では11小学校区全区で開催しているとはいえ、一部の教職員にはまだ理解いただけていないのが現状。県の方でも、生涯学習担当課より教職員の中にもう少し定着させるよう努力したいという話を伺っている。難しいことだとは思いますが、とはいえ、管理職の先生方には認識していただいているはずで、活動に対して理解を示していただけるかどうかは、先生によるとというのが現状。

【議 長】 イベント等開催する際に先生方は見に来てくれるのか。

【羽 石】 かつせらんどについていえば、管理職のごく一部の方は来て下さる。ただ、土日開催の場合は、職務としてではなくプライベートとしての参加となるので、管理職の先生から参加するよう指示できるものでもなく、ごく少数の方が来て下さるという状況。

【議 長】 先生が来れば低学年の子は特に喜ぶのではと思うが、協力は得難いということか。

【羽 石】 頼みづらいという部分もある。働き方改革が進められてきており、地域活動として協力をお願いするのはハードルが高い。

【議 長】 これまで会議での話し合いを経て、行政を動かすために「もっとこうすれば」という提言をしようという流れになっている。羽石氏としては、行政にどのようなことを求めるか。

【羽 石】 市に要請したところで答えがないので、十数年間このまま来てしまっている。これまでも、子ども教室と学校応援団、生涯学習課と学校教育課で事業が分かれてしまっているのが、学校応援団設立当時から統一・連携してくれないかと子ども教室のスタッフから声が上がっていた。子ども教室と学校応援団と連携を進めるための打合せ等も何度か実施してきた。市としての見解というわけではないが、結論としては社会教育事業と学校教育事業、相まみえないという結論に至っているのだなと関わっている人間としては感じた。学校によっては一体でやっているところもあるので、全体的に一体化に向かっていけばいいのにはと思うが、難しい所だとは思っている。地域や保護者がより関わりやすくなる、学校応援団に関わっている保護者が子ども教室にもかかわる、その逆もまたあるので、一体的な事業にした方がよいのではと考えている。埼玉県としても当初は家庭・地域連携という事で学校応援団と子ども教室の連携を発信していた。

【議 長】 かつせらんどでは、スタッフへの声掛けはどうやっているのか、新しい人材確保のための工夫があれば伺いたい。

【羽 石】 どこの教室も抱えている難しい問題である。かつせらんどで言えば、一本釣りしていくしかないと考えている。とはいえ難しい問題で、例えば保護者に声をかけた場合、子どもの卒業とともに抜けられてしまう可能性が高い。活動に理解を示してくれる保護者が少ないのが現実。かつせらんどでは、PTAの規約を変えてもらい学年委員さんに強制的に参加してもらうようにした。結果、人は確保できたが、負担に感じてしまう人が出てしまったというのも現実としてある。保護者に強制するシステムは運営が難しく、反省しているところではある。PTAは任意加入が大原則であるのに、そこに「強制」をするのはどうなのか、という意見もある。

【議 長】 市内のいくつかの学校では、そもそもPTAに入るか入らないかの選択か

ら始まるので、そこからまた地域子ども教室への参加となると、難しい部分ではあると思う。今後の課題としてはなにがあるか。展望や希望も含めてお伺いしたい。

【羽 石】個人的にはない。子ども教室は一人でも居場所づくりを続けていこうという理念で活動している。関沢キッズクラブでは、開催して子供の参加が0人の時もあった。ただ0人であっても継続して開催していくことが重要と考えている。つるせ台ひろばも、同じ考えで当時の代表の方たちが関沢キッズクラブと同じように土曜日に活動を始めた。これは地域によってそれぞれの考え方がある。地域の協力があってこそその事業であり、また地域の人の居場所でもあるので、地域の声を尊重していく必要があると考えている。

【議 長】活動が続ける中で、一番思い出に残っていること、嬉しかったことはなにか。

【羽 石】これが一番というのではないが、子どもたちがどこでも声をかけてくれることはうれしい。子どもが名前と顔を覚えてくれて、小学校を卒業しても声をかけてくれることは、とてもうれしいこと。私に限らず、地域の人たちが関わっているということに子どもが気付くだけで、防犯につながる事なので、安心安全のためにも大切なことだとも思う。また大人になってから交流が持てることも、子どもを地域で育てるという事の大事なポイントなのかなと思う。

【委 員】スタッフの入れ替わり状況を教えていただきたい。また連絡協議会について、年2回開催されているとのことだが、なにか課題をお持ちであれば伺いたい。

【羽 石】入れ替わりについては、学校ごとに異なるが、かつせらんどで言えばほとんど変わらない。私自身も代わりたいと思っているが、地域の人意見もあり代わっていない。人が代わるケースとしては、町会や民生児童委員さんなど。任期が終わると入れ替わる。ただ、役が終わっても、関わられる方には続けて関わっていただいている。多くの子ども教室で同じ状況かと思う。なかにはPTA役員で運営しているところもあるし、担い手がおらず自分が続けていくしかない切羽詰まった地域もあるし、人がおらずコーディネーターさんが全部抱えて周囲の協力も少しずつ無くなって休止したというところもある。入れ替わるというより、絶えさせないためになんとか人を補充するのに精いっぱいという感じ。連絡協議会については、過去は年4回開催していた。それは学校応援団との連携もあるが、学校との連携を進めるため、学校の理解を得られないという問題が現実としてあった。当初は教室を借りられないという状況だった。他の市町村ではそもそも学校に入らないでくれというところもある。これは教職員の理解というより、教育委員会レベルの理解の問題。そういった問題もあって、連携を進めるために4回、名称は「連絡協議会」ではなかったが、開催していた。しかし一部の子ども教室スタッフから、話し合いは自分の学校区のことだけで十分という意見が出た。自分たちの教室で困っていることは、その教室で解決すべきという方もいらっしやって、必要最低限の連絡のみをとということで年2回になった。各教室の予算の使い方についての情報交換なども

行っていたが、事務連絡のみになり、コーディネーター間の情報共有も減った。連絡協議会の中で出た意見として、小学校区に縛られずコーディネーターが活動できるようにならないかというものがあつた。コーディネーターも人間で、疲れた時は休みたい。そんな時に代われる誰かが行けたらいいのではないかと、という話もあつたが、小学校区の壁がありなかなか実現しない。私自身は呼ばれればどこへでも行った。連絡協議会で共有していくと他の学校区の様子もわかるし、様々な地域の人と出会える機会でもある。また学校に対して面通しできる機会でもある。いろんな学校と横にも縦にもつながりを持てるような関係性が連絡協議会で築けると、他の小学校区へ代理として伺うこともできるので、そこは連絡協議会で深める必要があるのではないかと考えている。

【委員】 かつせらんどでは会計管理や子どもへの配布物の用意は誰が担っているのか。

【羽石】 会計については、輪番で回すこともあつたが、負担に感じる方もいるので、最終的には私が整理するようにしている。他の人の余計な負担を軽減できているのでいいのかなと考えている。同じ人間がずっと会計を担う事への意見もあつたが、しかし市からの委託金であり、会計書類は公的なものなので管理作成が大変ということで、私がまとめている。お手紙は、原案は私で原案を作り学校が確認をして、印刷は他のスタッフにお願いしている。

【委員】 地域の活動なのでネットワークを築くことが重要と考えている。各小学校区でそれぞれ活動を続けるというのは、協力体制を整えるにも厳しい面があると思う。みんなが知っているということが大切。活動していく中で、スタッフの方以外で協力したい、様子を見たいという申し出はあるのか。また周知はしているのか。

【羽石】 子どもを預かる事業なので、協力していただけることはとてもありがたいが、不特定多数の人に突然来られても安全管理上困るので、対外的には告知も募集もしていない。協力のお願いに関しては、学校を通じてPTAや町会の掲示板に掲示しているが、素性が分からない方に関わっていただくことには不安も残るので、身元が分かる方じゃないと、というのがある。本当はたくさんの方に協力していただきたいところではあるが、事業の性質上、難しいところである。設立当初はNPOや地区社協、民生児童委員など、それぞれの地域で関わってくれそうな団体にはほとんど声をかけた。それが淘汰され残ったのが今の各教室の形である。予算的に厳しい面もあるかと思う。志木市や朝霞市では子ども教室をNPOに完全に委託しているので、市町村の予算や在り方によって異なるのかなと思う。お金があればできるというようなものでもないが、富士見市は1教室10万円と、活発に活動できるとは言えないのが現実。

【委員】 参加する子どもについて、6年生は5パーセント、3年生は50パーセントというお話があつたが、その原因は何だと考えるか。また、6年生も参加してくれるよう、興味を持ってもらえるようなプログラムを工夫することはできないのか。

【羽石】 高学年になると習い事をしている子が多く、どうしても参加は減る。また子どもの興味関心について、高学年の子に照準を合わせると、低学年の子

は参加できない場合が多い。学年を分けて開催することも可能ではあるが、高学年の子は興味がないと来ない。兄弟がいる子や、子どもの面倒を見るのが好きな子が参加してくれており、それが5パーセントのほとんどを占めている。大宮アルディージャをお招きするサッカー体験教室や、名栗げんきプラザの出前講座のドラム缶ピザなど、興味関心を引くような体験講座を開催すると高学年でも来る子は来る。ただ、そういった企画ものを継続して実施していくのは、金銭的にも場所的にも難しい。学校施設を借りて実施している以上、土日はスポーツ少年団など、他にも学校を利用している団体があるので、かつせらんどばかりが使うわけにもいかない。子どもたちの興味関心をひくような活動をやっていないわけではない。ただ、継続的に効果があるものではないのかなと感じている。

【委員】異年齢間の交流ができること、それが子ども教室の強みと感じている。1年生から6年生までの子どもたちが交流できる取組ができればよいと感じた。

【委員】資料の、スタッフからの意見について伺いたい。「スポーツ推進員から遊びに詳しい人を派遣してほしい」「指導者の紹介をしてほしい」など、すぐにも解決できそうな問題なのに、なぜ対応していないのか。こういうものから対応していけばよいのではないか。たとえば人材バンクや、国土交通省でやっている出前講座など、情報提供や声掛けは簡単にできるのでは。また一番気になるのが「学校との関係に課題がある」という意見。生涯学習課と学校教育課との調整で解決できる問題なのではないかと考える。学校の先生方に参加してもらうためにも必要と思うが、学校の立場としてはどう考えるか。

【委員】学校との関係については地域差がある。先生方の理解もそれぞれ異なるし、また先生側の子ども教室に対するニーズと、保護者・地域のニーズは異なる。教員側の立場として言えば、保護者会時の活動などはお互いにメリットのあることで、うまく機能したと考えるが、それ以外については常日頃活動を見ているわけでもないし、例えば夏の炎天下で活動されているのを見て心配に思ったり、教員側と地域とで、子ども教室開催に対する思いに乖離があると感じた。その乖離が、スタッフのみなさんの、学校への「もっとこうしてもらえたら」という意見につながっているのではと思う。地域側のニーズも分かるが、保護者会時に開催してもらっていたりもするので、難しい部分もあるかと思う。

【委員】学校との関わりについて、東っ子クラブでは、当初は活動を理解してもらえず、協力もなかなか得られない状況だった。しかし地域柄、町会のバックアップがしっかりしていたこともあり、町会も含めて地域全体で子供を育てようという事で学校も協力してくださり、先生方に理解していただいた。地区社協との連携事業で紙飛行機大会とおもちつき大会を実施していたが、その際は必ず先生方もたくさん来て下さっていた。とてもいい形で活動していたが、しかしスタッフ側がかつせらんどのようにできず、次の代に引き継げず限界を感じてしまった。最初はつぶしてはいけない、と町会からも言われていたが、地域の会議で「今の保護者は求めているのでは」という意見があり、町会長も校長先生にも理解いただき、一度活動を

休止することになった。今は名前だけ残してPTAで活動を続けてもらっている。埼玉県が開催したコーディネーター研修に参加して、志木市の事例発表を聞いた。志木市は放課後児童クラブと一括で業者に委託しているという話を聞いて、富士見市ではなぜこうならないのかという思いが出てしまった。高学年になって参加しなくなったとしても、低学年の時に子ども教室に参加して縦割りで面倒を見てもらっていた子どもたちは、面倒見がいい。地域子ども教室に来ていなくても、色々な場面でそれが伺える。中学生になっても、上の子が下の子の面倒を見るという形ができていし、地域の人に対して挨拶もする。また私たちもいろんな人と知り合いになれる。そういう事も鑑みて、何かの形で、今の子どもたちだからこそ、子ども教室が必要なのではないかと感じている。地域でできる人がいなくなったときに、そういう関係性が途絶えないよう、生涯学習課で場を提供してあげてほしい。今の子どもたちと関わると、4年生くらいになってもスキンシップの多い子がたくさんいる。さみしさを感じている子が多いのかなと感じている。子どものためにも、安定して継続的に子ども教室を開催できるようにしてほしい。

【委員】先程子どもはあまり変わっておらず、保護者のニーズが増えたというお話があった。体験学習を求めて放課後児童クラブに参加する親もいる。体験活動と学力に相関関係が明確になっており、家庭ではできない体験活動を外に求めるようになったと感じているが、10年前と比べて具体的にどのように変化していると言えるだろうか。

【羽石】漠然とした要望が多い。キャンプファイヤーがしたい、夏まつりをしたいなど、昔あったものを親から聞いてアンケートに書いてくる子が多くなった。また保護者から直接言われることが増えた。以前は人伝えに入ってきた情報が、直接「子どもにこんなことをやらせたい」と話を持ってこられるようになった。ただ、子ども教室はなにかを体験させたくて活動しているわけではなく、あくまで子どもたちの居場所を作るために活動しているものであり、体験は付随的なもので、なにか興味関心を引くものがあり、子どもの成長につながればと考えている。それ以上のこととなると、「教える」「教えられる」という関係になってしまい、それなりの成果を求められてしまうので、子ども教室としては成立しないと考えている。また、保護者間の情報の普及がかなり早くなった。こういう活動があるよ、と情報提供してもらえることはありがたいが、いいことも悪いことも、とにかく情報共有が速くなった。

【委員】みずほ台小学校区で子ども教室立ち上げの際、羽石氏には大変お世話になった。みずほ台わくわくエリアは、役職についている人が手伝うという形で発足した。人員確保についてだけ見ても、いろいろな方法があつてよい。学校に頼らず自分たちでやるという方法がよいのではないかと考えて始めた。

【羽石】先に委員から人材の紹介について意見があった。これは仰るとおりではあるが、人によっては誰を頼っていいかわからないという人もいる。確かに生涯学習課に問い合わせればすぐに済む話なのだが、その電話すら難しいと感じる人も中にはいる。今回の各スタッフの意見も、聞き取りをしたか

ら出たものであって、普段の連絡協議会など、会議の場ではなかなか出てこない。会議が終わった後の個人間の会話の中で出てくるようなもので、そういう機会がないと難しい。もちろん連絡協議会で人材バンクのご案内も行っているが、出席しているのは代表の方やコーディネーターの方など、一部の方なので、全体への浸透はなかなか難しいところ。学校の理解についていえば、校長先生が変わることですぐと変わってしまう。スムーズに運営出来ていたとしても、校長先生が代わり方針が変わること途絶えてしまう。富士見市に限った話でなく、県内全体でそういう話がある。「市として子ども教室をどうしたいのか？」という話に行きつく。やるのであれば、学校教育も巻き込んで実施していかないと難しい。富士見市としてどういう方針で進めていきたいのか明確に示してもらわないと、続けていくことはそろそろ厳しいのではないかと思う。このコロナ禍で、県内全域でほとんど活動が止まってしまっている。社会教育と学校教育と、連携をしてもらわないと、続けていくのは難しい。

- 【委員】 子どもを預かる事業なので、不特定の人には頼れないというお話があった。スタッフの確保は一本釣りとのことだが、どのような工夫をしているのか。
- 【羽石】 PTAに声をかけている。また地域については、かつせらんどでは町会長は必ず参加してもらおうようにしており、ただ副会長さんにも声をかけるようにしている。
- 【委員】 気軽に手伝いを申し出てくれる人もいるかと思うが、そういう人にはどのように対応しているのか。
- 【羽石】 かつせらんどはコーディネーター2人体制で活動しており、「なにかあったらコーディネーターへ」を徹底している。私がお場にいないとしても他の人が対応できるような体制を作っている。子どもと接するための知識はそれなりに勉強してきた。その知識をみんなで共有するようにしている。地域のみなさんにも、子どもとの接し方について1枚に要約してお渡ししている。また声掛けのポイントなどをお伝えするようにして工夫している。お手伝いを申し出てくれても、知らない人だと、その人のスキルが分からないので、かならず何回か活動に参加してもらって、できるかどうか判断してもらっている。私もお願いできるかどうか判断させてもらっている。何かあった時の責任問題があるので、そこには気を付けている。やはり一番に気を付けるのは安全管理。声の掛け方も重要で気を遣っている。子どもなのでケンカもするが、保護者へ説明するときには一方だけの話を聞いてするわけにもいかない。両方から聞き取りをし、学校に普段の様子も教えてもらい、かなり気を遣って対応している。ケースバイケースでそれぞれ対応が異なり、そういったことも理解してもらわなくてはいけないので、手伝ってくれるなら誰でもいい、というわけにはいかない。
- 【委員】 水谷子ども広場の土曜道場では、バドミントンだったり絵手紙だったり、分散していくつかの団体が子どもたちをみている。かつせらんどは全員1か所でみているのか。
- 【羽石】 そうではない。体育館、図書室、校庭、それぞれの活動場所で、それぞれの活動をしている。スタッフはそれぞれの場所に配置している。また去年まではミニかつせらんどとして、家庭教育支援も行っていた。算数ができ

ない子、漢字が書けない子、宿題も含めて、家庭で保護者が見守れない方向けに、教えるのではなく、あくまで見守りとして、子ども教室として学習支援活動を放課後週3回行っていた。ニーズもあり、平均して20～30人が参加していたが、コロナの影響と、また学校の考え方が変わったこともあり、今後はやらない予定である。

【委員】 行政に対して求めることはないとのことだが、今回生涯学習課より、社会教育委員会へ提言が求められているという事は、生涯学習課が危機感を持っているという事だと思う。その理由は何だと思うか。

【羽石】 行政に対して、これまでずっと伝えてきた。私自身社会教育委員だったので、社会教育委員会会議で扱い提言も出している。しかしあまり変化がないというのが現実。「変えてほしい」ばかり言っても仕方がないので、問題を提起して、広く伝えていくことが重要だと考えている。社会教育委員会会議で危機感をもって話すのではなく、現状は知っていただきたいが、各教室抱えている問題の根底は同じで、私たち自身も解決に向けて動かなくてはいけないと考える。かつせらんどはさまざまところで広報したので、事例発表をお願いされることが多い。また県や他市から視察も来る。活動について広く発信して情報を共有していくことが重要だと考える。そうすることで行政も変わっていくだろうし、私たち自身お互いに真似するべきところは真似し、負の課題については、悩みながら解決していけたらと考える。なので、私自身としては行政に特に求めることはない。かつせらんども、本当にいろいろなことがあった。コーディネーターを長年担っていることに関して学校から意見があったり、「あなたが死んだらどうするの」とまで言われたこともある。かつせらんどは、コーディネーター2名体制で運営してきたので、ある程度は引き継げたのではないかと考えている。また私自身長く続けようと思っっているわけではなく、しかし地域からの声もあるので続けている。子ども教室がなくても、子どもの居場所づくりにかかわる活動は他にもあり、小さいながらも活動してきた。子ども教室に関してはたまたま文部科学省が音頭を取り、一つの集合体となって始まっただけで、いつやめても構わないと考えているし、続けられるなら続けられればいいと考えている。子ども教室がなくなったとしても、他の団体や活動により子どもの居場所がつくられて、新たにネットワークを形成して1から始めてもいいのではないかと考える。子ども大学など、様々な社会教育事業があるので、子ども教室が淘汰されてしまっても問題はないかと考えている。しかし続けるのであれば、学校応援団との関係は改善すべきと考える。

【委員】 みずほ台わくわくエリアは、校長先生が児童を連れてきたり、協力してくれる。

【羽石】 それは学校によるとしか言えない。

【議長】 これまでの会議から、保護者のニーズとして、託児的なことが強く求められているという話が出た。そこが担い手側の負担になってしまっているのではないかと考える。また富士見市では各団体へ委託しているが、志木市のようにNPOに委託するのも一つの方法だし、直営にしてしまうのも一つの方法ではないかという話も出た。そういった運営方針について、考え

直す過渡期だと感じるが、羽石氏はどう考えるか。

【羽石】「託児」はまさにそのとおり。かつせらんどでも、スタッフや地域の方から「子どもを預かるのは私たちの仕事ではない」という意見があった。とはいえ、何か行事の際に子どもが暇そうにしているのであれば、預かる、というのも居場所づくりのひとつということで活動してきた。放課後児童クラブとの住み分けなども、連絡協議会でも深く議論してきた。県からも毎年連携状況について調査が来ている。どこからどこまでが連携なのか、非常に答えにくい問題だが、富士見市ではあまり連携は進んでいないと思う。かつせらんどでは、児童クラブのスタッフの方も関わってくれてはいるが、向こうは「仕事」なので、児童クラブの子どもだけを見てもらっている。ただ、私たちは児童クラブの子であっても活動に参加させるという方針で活動している。一番難しいのが、個人情報の部分。かつせらんどでは管理の問題上、児童クラブの名簿は共有させてもらっている。他の小学校区では守秘義務という事で一切教えてもらえないという教室もある。かつせらんどは連携が進んでいる方なのかなと思う。

【委員】放課後児童クラブとは当然一緒に活動するべきだと考える。最初から児童クラブのスタッフの方が子どもたちを連れてくる。

【羽石】土日開催のところはまた話が違ってくるが、平日開催のところは、うまく連携している所と、そうでないところがある。事業団との関わりや、個人情報の問題があるので、簡単な問題ではない。ただ私たちとしても、管理の問題上、連携は必要。たとえばふじみ野市では、元校長が統括コーディネーターを務めているので、学校と連携をとりやすいのかなと傍目からは感じる。子ども教室の温度感や在り方、成り立ちや目的は地域によって異なるので、直営にするにしろ、委託するにしろ、しっかり議論し検討した上で結論を出してもらえればと思う。子ども教室は、続けていくことも大変な事業であるが、変えていくこともまた、大変な事業だと考える。

【議長】他に意見はあるか。羽石氏はどうか。

【羽石】社会教育委員会議で提言していただくことで、富士見市の社会教育がより良い方へ変わっていけばと思う。

【議長】子ども教室スタッフのみなさんから意見が出ている以上、行政としてあり方を見直すべきと考えるので、その方向で提言していく。

3. その他

○特になし

次回会議日程

令和2年度第6回会議

日程：令和3年2月18日（木）午後7時～

場所：中央図書館 視聴覚ホール

4. 閉会